研究ノート

ミストラルの連邦主義思想の展開と変動
—プロヴァンスとカタルーニャの詩人たちの交流—

安達 未菜 *

1. はじめに

第二帝政期の 1854 年に南フランスのプロヴァンスで創設された「フェリブリージュ」(Félibrige) はプロヴァンス語の詩文を中心とする文芸活動を通してオック語 (プロヴァンス語) と南フランスの伝統文化の復興を目指した団体として知られる。この団体は 1862 年に初めて名簿および会費、規約が制定され、組織化し、その後第三共和政にかけて会員を増やし、組織を拡大させていく。国家のナショナリズム形成期にあってはさまざまな政治的運動が見られるが、フェリブリージュに関して顕著な活動は知られていない。本稿の目的の一つは、フェリブリージュの政治活動に関する位置づけを再考することである。

本稿では、なかでも最も連邦主義を標榜したフレデリック・ミストラル (Frédéric Mistral：1830-1914) に焦点を当て、とくにカタルーニャの詩人との関係を深める 1860 年から 1870 年にかけてのミストラルの政治思想の変化について検討する。彼はフェリブリージュ創設者の一人で、統率者である。それゆえ、彼の政治思想はフェリブリージュの構成員の意向の範疇にあると考えられる。さらに、この問題の背景には、第二帝政期にあってボナパルティスムへの傾倒が見られないアヴィニョン地域の人々の政治思想がある。それは同時に、ナポレオン三世の政治体制後半の綻びの一面に関わるものである。実際、本稿で見るように、ミストラルの連邦主義は、彼のプロヴァンスにおける固有語と伝統文化保持への希求、逆に言えば第二帝政の中央集権体制の打破を志向する意識のなかで展開していくのである。

ミストラルの連邦主義に関しては、彼の分離主義的傾向や地方分権を主とする連邦主義の芽生えや変遷などについて既に多くの研究がなされている。それでも、なおも検討すべき問題として以下の二点が挙げられる：

* 東海大学文学研究科文明研究専攻博士課程後期三年

(1)ミストラルの連邦主義構想にはいくつかの転換点が見出されるが、その根底には彼自身の地域への強い意識が存在する。果たしてそれはどのような意識であり、フェリブリージュにおける彼自身の活動をどのように支えていたのか。

(2)ミストラルの連邦主義構想が地域への意識と密接に関わるとするならば、彼は連邦主義として具体的にはどのような形態を構想していたのか。また、それはどのような形でプロヴァンスの言語、文化の保持と関わるのか。

これらの問題を検討する上では、先ずはミストラルが連邦主義構想を抱く経緯、その構想の変化について詳察することが肝要である。本稿では、上の二つの問題点の前提として、ミストラル自身の連邦主義構想の構築と変化について先行研究をふまえて検討する。

フェリブリージュに関しては、ミストラルをはじめ創設当時から関わった人々の著作、書簡、機関誌等の記事など多くの一次資料が残されている。また、ミストラルが死去した 1914 年から十数年の間には機関誌などに多くの回想が掲載されている。こうした一次資料の多くはルネ・ジュヴォー[1]の 4 巻からなる著作『フェリブリージュの歴史』(*Histoire du Félibrige*) に収められている。この著作はフェリブリージュの創設から 1982 年までを、この団体の歴史と人々の動向を一次資料を用いて忠実に再現する―分析や考察は少ないものの―手法で詳述した研究書である。本稿でもこのジュヴォーの著作を基礎にし、これにその他の資料を加えて検討を進める。なお、本稿の原典などの引用は筆者による訳出である。

2. ミストラルの連邦主義への傾倒

フェリブリージュに関して、主だった政治活動はなかったのだろうか。現在のフェリブリージュの前カプリエ (Capoulié, 統率者) であるファーブル (Pierre Fabre) は、2002 年の著作において、フェリブリージュにおける政治活動について以下のように述べている。

> 「フェリブリージュは、すべての政党がパリを拠点に構想され、統率されているという単純な理由で、いかなる政党に一度も参加したこともなく、それを支持したこともない。」[2]

さらに、ファーブルは「言語というものは［政治的］傾向をもたない」し、「人文

主義の価値観は政治的意見が何であれ、誰もが共有できる」ものであるがゆえに、フェリブリージュにとって政治思想は重要ではないのだと主張する。また、彼はフェリブリージュの創設者の一人であるミストラルの次のような言葉を引用して、この主張を補足する。ミストラルはフェリブリージュの初代カプリエを務め（1862-1888, 1876年以降二度目のカプリエを務めている）、1904年にノーベル文学賞を受賞した詩人である。

> 「フェリブリージュはいかなる党からも距離を置いている。[…] フェリブリージュはあらゆる政治［活動の］外で生まれたのであり、フェリブリージュは［政治の］外に留まらなければならない。」[3]

このようなフェリブリージュに対する政治的見解については、南フランスを対象としたオクシタン研究者のマルテル（Philippe Martel）も同様の指摘をしている。フェリブリージュは「その創設当初から、非常に多様な政治的動向と結びついており、そのために団体規約があらゆる政治的議論を慎重な［判断の下で］禁止した」[4]。確かに、団体の会員の政治思想は一貫するものではなく、その団体としての政治運動はほとんど見られない。

それでも、フェリブリージュの会員が少なからずさまざまな政治思想の下にそれぞれの主張をしていた。そもそもフェリブリージュにおいて政治的、宗教的な議論の禁止が掲げられるのは1876年5月のことである[5]。1854年の団体設立当初および1862年の最初の規約制定時には、政治的言動の禁止を命ずる条項は掲げられていなかった。したがって、当初、団体会員たちは各々に政治的主張をしていたが、1876年に彼らはそれを禁じなければならない状況に陥ったのだと考えられる。フェリブリージュの政治的言動の禁止以降、共和主義者や社会主義者たちはフェリブリージュから分派して「フェリブリージュ・ルージュ」を設立した[6]。その後は、フェリブリージュ・ルージュがフェリブリージュに代わって政治的主張—とくに連邦主義の主張—をしていくこととなる[7]。

こうした連邦主義思想の兆しは、すでにミストラルに見いだすことができる。実際、ミストラルは「フランスに適合した連邦国家」（l'État fédéral appliqué à la France）[8]を主張したとされる。すなわち、フランス国家という枠組みにおいて地域の独自性を保つことのできる連邦主義を主張したのである。1870年前後における彼の連邦に対する主張の基盤となる思想は、政治家プルードンのそれであった。プルー

ドンの「フェデラリスム」とは、「家族の長、コミューヌ、カントン、地方、国家」の間の「双務的」かつ「相互的」な「契約」の下で、民主主義を現実化することである。ここでは「個人」の主権は、国家との契約によっていささかも制限されず、地理的、社会行動学的に歴史や伝統に根ざした共同体を構成単位とされる[9]。実際、ミストラルは地域の意志が反映される国家体制を志向したが、これは上のプルードン的連邦主義に相当する。

その一方で、ミストラルの政治思想の傾向は一貫したものではなく、時期に応じて変化が見られる。1848年の二月革命期においては、自らをジロンド派と称して共和主義に傾倒していた。このとき、彼は政治家であり詩人でもあったラマルティーヌを支持し、その著書『ジロンド党史』を読んでいたと思われる。第二共和政期のフランス南部では左翼勢力が浸透していたこともあり[10]、フェリブリージュの主要な拠点地域であるアヴィニョンにおいても同様であった[11]。そうしたなか、ミストラルも革命賛歌をジャーナル誌に投稿し、共和主義へ没頭したのであった。

しかし、1851年12月2日にルイ・ナポレオン（後のナポレオン3世）のクーデタによって第二共和政が崩壊し、第二帝政が敷かれると、政治への期待が薄れるとともにその言動も控えられていくことになる。ミストラルのこうした傾向は、第二帝政期にボナパルティスムを支持しないプロヴァンス全体[12]を背景としていた。この後、ミストラルは一度政治活動から離れ、文芸活動に専念し、プロヴァンスの牧歌的叙事詩『ミレイオ』(1859年）を刊行した。この作品の成功が彼をノーベル賞受賞へと導くことになるが、それはラマルティーヌから好評を得た。その後、1860年代以降ミストラルは再び政治的言動を始め、連邦主義を展開するようになる。

この時期（1862年)、フェリブリージュは団体構成規約の制定と会員名簿が作成され、組織化へと向かうことになる。団体は会員数7名から総勢50名の協会となり、そこには綴字法に関する主張の対立から文芸活動の袂を分かっていた詩人たちを含め、人文学の知識人や数名の聖職者が会員に加わった。この規約制定時にカプリエが設置され、初代としてミストラルが選出された。

このときのフランスの状況を見ると、それは1859年にオスマン化とも呼ばれる「明るくて清潔な都市」[13]パリが形成され、産業発展も伴い地域の人口流出が進んだ時期であった。また、義務教育の側面においても「同時教育」の進歩に伴う教育期間の伸長で、完全文盲者の割合は減少傾向にあった[14]。不完全であったにせよ、このようにフランス語が普及していく時代、アヴィニョンとマルセイユを中心にオック語による政治的プロパガンダが出版されていた[15]。フェリブリージュの文学活動の展

開が、こうした読者層の厚さに裏打ちされていたことは想像に難くない。それは、ミストラルを中心とするフェリブリージュの政治活動に関しても同様であったと思われる。

こうしたなかで、ミストラルはカタロニア詩人やロシアの知識人たちなど国際的な交流をもつようになり、連邦主義への情熱を深化させるようになる。

3. カタルーニャ詩人たちとの出会い

前節でふれたように、ミストラルはスペインのカタルーニャの詩人たちとの交流によって自らの連邦主義を中心とする政治的意向を展開させるが、その経緯は以下のとおりである。

ミストラルがカタルーニャの詩人たちと交流し始めるのは1861年からである。この年に30年ぶりにタラスク祭[16]が催されるが、その機会にカタルーニャの使節カルヴェ（Damase Calvet）が列席した。彼はスペイン政府から2年間、化学工業製品の研究の任務を受けており、その期間中にタラスコンに寄ったのであった[17]。カルヴェの訪問に際し、ミストラルはカタルーニャ詩人たちに「カタルーニャ詩人たちに捧げる詩」（*L'Ode I Troubaire Catalan*）を贈った。

ミストラルは、この詩のなかで「カタルーニャの兄弟よ」と呼びかける。そして、1112年にプロヴァンスのドゥース（Douce）王女とバルセロナのレイモン＝ベランジェ（Raimond-Bérenger 1er）の婚姻によってこれらの地域が一体化されたことを思い起こさせ、共通の歴史的基盤と言語および風習が融合された共同体としてその一体性を語りかけるのである。さらに、かつてはカタルーニャとプロヴァンスの吟遊詩人トルバドゥールたちが王侯貴族や聖職者たちの面前で叙事詩を唄い、それぞれの言葉を高め合ったことを強調する。ミストラルはこの詩を通して、カタルーニャの言葉がオック語と同様にロマンス諸語の系統に当たること、そこには19世紀の国境という枠組みを超えた歴史的友愛の絆が見出されることを示したかったのである。その意思は、彼の次のような一節に込められている。

> 「古いロマンス語を話すということを取り戻そう。ロマンス語は家族の絆を示すものであり、祖先に我々を、大地に人々を結びつける秘跡である。」[18]

ここで、ミストラルは「我々の言語」とともにカタルーニャを「蘇らせる」のだと

呼びかける。この「我々の言語」はそれぞれの地域における伝統的ロマンス語を意味する。彼のこの詩における語り口には連邦主義の主張へと向かう最初の兆候が見出される。この詩を受け、カタルーニャの詩人たちはミストラルの呼びかけに応え、これを機にプロヴァンスとカタルーニャの間に知的交流がもたらされた。すなわち、「国際的な友好関係」(amitié internationale) が築かれたのである。

ミストラルによるこの詩は、ミストラルとカタルーニャの誌人たち延いてはプロヴァンスとカタルーニャの結びつきにとって記念碑的なものであった。実際、1868年5月のバルセロナでの「花の詩文会」(Jocs Florals, Jeux Floraux) にプロヴァンスの詩人たちが参加した際にも、また逆に同年 9 月にカタルーニャの文学者たちがプロヴァンスを訪れた際にも、そのそれぞれでこの詩が詠唱された。

カルヴェはプロヴァンスの年間雑誌『アルマーナ (*Armana*)』に次の言葉を寄せている。

> 「美しきプロヴァンス、あなたはラテン民族の 3 つの偉大な家族、すなわちフランス、イタリア、スペインを結束へと [...] 向かわせたいのでしょう」[19]

この一節からは、カルヴェがミストラルと彼の詩 (カタルーニャ詩人たちに捧げる詩) をどのように受け止めていたのかが見てとれる。実際にプロヴァンス語をはじめ、フランス、イタリア、スペインに展開するロマンス語は、その語幹にラテン語由来の共通性をもつ。それゆえにミストラルは、これらの言語の語幹によって見出されるようなラテン民族の結びつきを志向していたことが窺える。

4. 『カランダル』刊行とミストラルの心情の変化

1861 年以降、ミストラルは二作目となる長編叙事詩に励み、1866 年に『カランダル (Calandau)』として刊行される。カタルーニャの詩人たちとの交流を考えると、ミストラルの連邦主義は言語を基調としたある種の同胞意識として捉えられる。しかし、その構想は著作『カランダル』を通してより明確な主張へと展開する。

この時期にミストラルはアイルランド出身のボナパルト・ワイズと交流をもつようになる。ボナパルト・ワイズ (William Charles Bonaparte Wyse:1826-1892) はアイルランド生まれの詩人で、皇帝ナポレオン一世は母方の遠戚であった—母親のレティツィア (Letizia) がナポレオン一世の姪に当たる。ボナパルト・ワイズは 1859

年にプロヴァンスを訪れた際にミストラルの著作『ミレイオ』を読み、大いに熱狂し、ミストラルと親交をもつようになった人物である。彼は後にオック語を学び自らも詩作を行っている[20]。また、フェリブリージュの主要メンバーであるオーバネル（Theodore Aubanel:1829-1886）やブリュネ（Jean Brunet:1822-1894）とも交流を深め、やがて自らもフェリブリージュ会員となるが、「アイルランドのフェリーブル」と呼ばれるほどフェリブリージュに傾倒していたことが知られている[21]。

こうしたボナパルト・ワイズはミストラルと非常に厚い信頼関係を築いていた。それは彼の息子の洗礼に際してミストラルが代父を引き受けている点からもわかる。ミストラルにしても同様で、ボナパルト・ワイズに宛てて書き送った書簡には、国家や地域、プロヴァンスやカタルーニャに関するミストラル自身の政治的意識に関わる内容が綴られている。

1865年3月1日付のボナパルト・ワイズに宛てた書簡は、ミストラルのそうした心情の一端を覗かせている。ミストラルは、プロヴァンスにおける郷土への愛国心の不十分さを嘆き、ルーマニーユ（Joseph Roumanille:1818-1891）に対して「ルーマニーユは民衆的な奥深い感性を備えているが、愚かな正統王朝主義のためにプロヴァンスが一つの共同体であったこと、我々が掲げた原理が共和主義に由来することを忘れている」[22]と指摘する。ルーマニーユはフェリブリージュの創設者の一人であるが、寄宿学校の元学監でミストラルの師であり、1845年以来ともに文芸活動を進めてきた人物である。さらに、オーバネルを詩人として大いに評価しながらも、その詩作が芸術のためだけのものであるとし、ブリュネなどその他の者にしても、プロヴァンスにおける13世紀の文学の偉大さ、それが地域の自由な気運から生じたこと、そしてプロヴァンスが民衆的共同体として一地域をなしていることに心を向けていないとする。その上で、彼はボナパルト・ワイズに以下のように書き送る。

> 「我々は連邦主義的な運動を準備し、将来に向けて推し進めていこう。」
> 「私はフランスの分離を夢見るような愚直な考えをもっているわけではない。将来来るべき姿は統一であって、分離ではない。しかし、同時に、それは自由とくに調和に基づく民衆として、個人としての自由を備えたものである。将来を見据えれば皇帝自らも地方分権を奨励するであろう。」[23]

ボナパルト・ワイズに宛てたこの書簡は、以下の点で興味深い。それは、このなかにミストラル自身の失望と期待が混在しているからである。ミストラルはプロヴァ

ンスを歴史的にも民衆的（民族的）な一地域として捉え、統一化が進むフランスにおける地域文化の保持の気持ちを強くするが、それはフェリブリージュの同胞たちには必ずしも共有されていなかった。そのことがミストラルにある種の失望感を与えていたのではなかったか。しかし、それでもミストラルは将来的な展望を捨ててはいなかった。すなわち、連邦主義という希望である。他の点で興味深いのは、ミストラルの連邦主義が、分離という発想ではなく、むしろ地方自治を推し進めることにあったことが窺える点である。これは、カタルーニャの詩人たちとの“同胞意識”とは性格を異にする。すなわち、一方では同じロマンス語をもつ地域としてはそれぞれが伝統文化、言語を尊重しようという意識をもちながら、他方ではフランス国内におけるプロヴァンスの独自性を保持するための地方自治、ある種の連邦制を主張していると感じられるのである。

ミストラルの『カランダル』に議論を戻す。上で述べてきたように、ミストラルは1861年以降の心情の変化のなかで『カランダル』の執筆を進めた。1866年1月6日、ミストラルは12歌から成る長編叙事詩『カランダル』（Calendau）を完成させる[24]。この叙情詩は、アンシャン・レジームの終わり頃を舞台とし、カシス（Cassis）の勇敢な漁師がエステルの愛を得るまでの一連の物語であるが、エステルを見舞う悲劇と彼女を救うカランダルという物語構成にはミストラルの政治的思想が表れているとされる。内容は、エステルが夫である悪人（brigand）に財産（ses biens）を奪われ、ジバル山（Gibal）での生活を強いられることとなり、彼女を愛するカランダルが簒奪者（usupateur）である配偶者に勝利し彼女を救済するというものである。ここで描かれるエステルは圧政を敷かれたプロヴァンスを、カランダルは詩人ミストラル自身を象徴する[25]。さらに、この詩においては、アルビジョワ地域に対する十字軍の侵攻について辛辣な言葉で語られている[26]。これは北フランスによる南フランスへの侵攻を意味し、とくに1870年頃のミストラルの記述のなかに度々見られるモチーフである。それは、アレゴリー的詩を通しての自らの政治的主張の公表であった。そのため、この著作は刊行当初から印刷所から一部の詩の削除要請を受けている。ミストラルは削除することを断って別の印刷所に依頼をし、最終的にはルーマニーユの経営する出版社で1535部が印刷され、刊行された[27]。この作品についてレオン・テシエ（Léon Teissier）は「ミストラルは、分別をわきまえながら、革命的な言動を開始した」[28]と述べている。この作品については、実際に、ミストラルが制作の意図をゴー（Jean-Baptiste Gaut:1819-1891）に書き送っている。

「カランダルは、7年に及ぶ［執筆］作業と考察の成果であり、中央集権と単一化に対する私の闘争の考えに従い［書いた］ものである。私のカタルーニャ詩人たちへの詩のなかで粗描していた政治［思想］の方針（le programme politique）は連邦（fédération）である。」[29]

すなわち、ミストラルは中央集権的で単一的なフランス政府に対する彼自身の政治闘争として、連邦を志向していたのであり、既に1861年の「カタルーニャ詩人たちへの詩」において、その思想の萌芽があったのである。

これは1861年以降の彼自身のプロヴァンスへの思い、とくにフランスという国家に対する地域保護の意識の一つの表れである。ところで、ミストラルが1859年に『ミレイオ』を出版した後に『カランダル』を執筆し始めた1860年末から61年末にかけてのフランスは、ナポレオン三世に対する反帝政派によって、政治体制が権威帝政から自由帝政への移行の兆しが見え始める時期である。このとき、後の第三共和政を樹立する新たな共和主義者たちが登場し、さらに1863年には立法院選挙において反対派が勝利して、立法院内に野党が結成された。しかし、ナポレオン三世の権威主義的政策は強められ、『カランダル』が完成される1866年までそれが続くことになる[30]。とくに1863年以降、議会での議論が新聞を通じて世論にも反映されるようになると、当初からナポレオンを支持しないミストラルはこうした状況に政治的野心を奮起させていたのではないかと考えられる。中央集権的政策の継続に対して、野党を支持する民衆の見解が広まるなかで、ミストラルはそうした反帝政派の政治思想を鼓舞することを狙っていたとも考えられる。さらに興味深いのは、こうしたミストラルの『カランダル』に見る連邦主義に対し、ボナパルト・ワイズがそれを称賛していることである。とくにミストラルの連邦主義への傾倒は、カタルーニャの詩人たちとの交流のなかで益々強化されることになるが、彼らとの親交を深め詩文会を開催するにあたり、その催しにかかる費用を負担し、それを推奨するのもボナパルト・ワイズなのである。

5. ヴィクトール・バラゲとの関係

第3節で述べたように、ミストラルは1861年頃からカタルーニャの詩人たちと交流を深め、プロヴァンスとカタルーニャの相互連携を推し進めていった。そうしたなか、ミストラルは彼の連邦主義思想に最も影響を与えた一人であるヴィクトール・バ

ラゲ（Victor Balaguer: 1824-1901）と出会う。バラゲはカタルーニャ出身の著作家、政治家であり、カタルーニャの中心地であるバルセロナにおいて 1843 年から 1868 年まで自由政党の党首を務めた人物である。

一方、バラゲは詩文家としても活動している。彼は 1859 年にバルセロナでの「花の詩文会」（Jocs Florals）を復興させることに尽力している。この「花の詩文会」はプロヴァンスやカタルーニャ、バスクなどのロマンス語地域の歴史的、伝統的な詩文会 [31]であり、ロマン主義隆盛を受けてこの時期にバルセロナで復活された。バルセロナでの「花の詩文会」はこの年以来再開されており、1861 年にはバラゲが Mestres en Gai Saber[32]の栄誉を得ている。こうした事実を考えると、ミストラルと同様にバラゲもまた自らの地域に根付いた言語と詩文の伝統に身を委ねていた一人であることがわかる。

フェリブリージュに対するバラゲの影響の一端は、後のカプリエであるフェリックス・グラ（Felix Gras:1844-1901）による 1893 年の記述にも垣間見られる。グラは 1860 年頃のバルセロナでの詩文会におけるバラゲの様子を回想し、次のようにその人物像を評している。

> 「私はヴィクトール・バラゲの力強く、それでいて優しい言葉を聞いた。彼は情熱的な演説家、勇猛な愛国者として、政治の嵐に駆り立てられ、神の手に導かれて登場した。彼は情熱的な語りと偉大なる魂を備えた詩を携えて、我々に自らの不幸を伝えた。それはまさにカタルーニャの英雄を見る思いであった。［…］彼の存在なしにはカタルーニャの亡命者のことを意識することはなかった。」[33]

ミストラルがバラゲと出会うのは、『カランダル』が完成した半年後、1866 年の夏であった。その経緯についてはジュヴォーが詳細を伝えている。バラゲはバルセロナにおいて彼以上の者はいないほどの第一人者で、当時は交流を求めてフランスや他の国を訪問しており、フランスの国民議会にも派遣されるほどであった。そのなかで、1866 年の夏にバラゲはプロヴァンスを訪ねた。その目的は、翌年の 5 月 1 日にバルセロナで開催される「花の詩文会」にフェリブリージュの会員を招待するためであった。この機会にバラゲはフェリブリージュのミストラル、ルーマニール、オーバネルらと友好関係を築き、しばしプロヴァンスに滞在した。そうしたなかで、バラゲはミストラルとプロヴァンスを称え、この年の 7 月 13 日にミストラルに「プロヴァ

ンス万歳」(Viva Provenza) なる詩を贈ることになる[34]。これに対してミストラルは「伯爵夫人」(La Comtesse) を書き上げ、これを 1866 年 8 月 22 日に彼に捧げるのであった[35]。

こうした親密な関係のなか、この年の終わりにバラゲの名がスペインの追放者リストに挙がる。当時のスペインはイザベル二世の統治下にあり、徐々に専制的政権になるにつれてカタルーニャでは反体制派の勢力が高まっていた[36]。スペインから追放されたバラゲはフェリブリージュに保護を求めることになる。これに対し、フェリブリージュは「プロヴァンスは親切で友好的である」として彼を受け入れる。また、ミストラルも「亡命者は神と祖国の名において歓迎される」と述べ、その亡命を迎え入れるのであった[37]。他方、バラゲの受け入れに対しては批判的な意見も少なくなかった。それは、当時のフェリブリージュは政治思想的には多様な立場や考え方が存在していたからであった。

しかし、ミストラルにとっては、自由を尊重し、改革を目指すバラゲの存在は大きな影響をもたらした。実際、ミストラルは連邦主義構想を膨らませ、政治的活動への意志を高めていった。その一つがパリ訪問である。

1867 年 1 月、ミストラルは連邦主義を標榜する政治家に会うためにバラゲとともにパリへ出掛けた。出発に際しては、1 月 3 日にボナパルト・ワイズがフェリブリージュの面々を集めて祝宴を開き、二人のパリ訪問を次のように称揚している。

> 「皆さん、かつての壮大な教会に向かって光輝く階段を上るがごとく、二人の勇敢なマジョラルが我々を政治の高みへと導いてくれる。」[38]

この引用からは、ボナパルト・ワイズが政治的活動を志向する意識をもっていたことが窺える。ミストラル自身、彼に対する書簡ではしばしば政治的な思いを打ち明けていたことを考えれば、こうした当時の状況がミストラル自身の連邦主義を高めていったことは否定できない。

パリへの出発は 1 月 20 日であった。ミストラルとバラゲのパリ訪問、とくにミストラルの思いについては、フェリブリージュの会員で、ジャーナリストであり詩人、翻訳家であるマリウス・アンドレが詳細を伝えている。

> 「バラゲは、自身を擁護してくれるスペインの自由主義者を探すため、その一方でミストラルは出版されたばかりの『カランダル』を携え、共和派の野党の

政治家に働きかけ、協力してナポレオン三世の失墜に向けて行動に移すことを望んで、パリに向かった。彼らの構想は一致していた。それはフランスに共和政を伴う連邦主義を導入する目論見であり、ミストラルは正統王朝派あるいはオルレアン王朝派といったいわゆる右翼の君主制が生じる可能性を考えたくはなかったのである。」[39]

アンドレの言葉は、純粋な詩作活動から政治へと傾倒していくミストラルの思いの変化を示唆している。実際、パリへの出発の 2 週間前にバラゲがカタロニアの劇作家ペレイ・ブリズ（Pelay Briz）に宛てた書簡でも、ミストラルを次のように評価している。

「[ミストラルは] いつの日か躍進する偉大な政治的出来事の準備に加わった。彼はフランスで政治的に重要な役割を果たす心積もりである。その役割とはヴィクトル・ユゴーやラマルティーヌが果たしたのと同様の重要性を担っている。」[40]

果たしてミストラルの心情は詩文から政治へと変化したのであろうか。この点に関してアンドレは、ミストラルにしても、また、彼の周辺の誰にしても、この問題について何も残してはいないし、語ってもいないと指摘しながら、次のように推察している。

「ミストラルが望んでいたのは、単に反体制の政治活動に身を置くことだけではなく、ナポレオン帝政下の中央集権的政治を崩壊させる運動の主導者になることではなかったか。[…] ミストラルは、言語や伝統を護りかつての自由をフランス語との調和を損ねずに復活させるためには、詩文の創作活動だけでは十分ではない、むしろ政治という論争の場に身を投じなければならないことを理解していた。」[41]

当時のパリでは「ナンシー綱領」（Le Programme de Nancy, 1865）をはじめ、地方分権の議論もあった[42]。しかし、実際にはミストラルのパリ訪問は全く成果を挙げられなかった。ミストラルは 4 月 18 日に故郷のマイヤンヌに戻った[43]。パリを離れる直前の書簡でミストラルは、「私はパリを出てフェリブリージュに戻る」（傍点は

筆者による）[44]と記している。この言葉には、政治活動への強い意志が打ち砕かれたミストラルの失望が滲み出ているとも感じられる。

これまで見てきたように、バラゲはスペインの国家形成におけるカタルーニャの政治的位置付けだけでなく、プロヴァンスの連邦制の確立という政治的傾向にまで影響を与えていた人物であった。ミストラルも自らの連邦主義思想を高める上で大きな影響を受けていたことがわかる。パリから戻った後、バラゲは1868年に国外追放が解かれてカタルーニャに戻る。ミストラルは1868年のカタルーニャでの「花の詩文会」に参加するなど、その後もバラゲをはじめとする詩人たちとの交流を続けることになる。

6. 「伯爵夫人」に見る政治思想

1866年8月22日にミストラルがバラゲに贈った詩「伯爵夫人」(*La Coumtesso*)には、『カランダル』に見られる以上に過激な表現を含めて連邦主義的な政治思想が強く表現されている。それゆえにこの詩は、発表されるとすぐに、「中央集権化に対する寓意作品でしかなく、分離主義の意向が見られる」[45]と酷評された。この詩では、タイトルとなっている伯爵夫人がプロヴァンスを象徴し、フランスとプロヴァンスの関係性が歴史的時間軸に沿って詩的な表現で描き出されている。そこには明らかにミストラル自身の意図的な政治的指針が表れていると考えることができる。さらに、この詩の巻頭には、これを受け取ったバラゲが寄せた言葉が付されている。

> 「人々は彼女［Coumtesso］が亡くなったと言うけれども、
> 私は彼女が生き続けていると信じている。」[46]

この一文には、バラゲがこの詩を通してプロヴァンスの再興を願う気持ちと同時に、ミストラルがこの詩に託した主題が見出される。その意味では、この詩に謳われているプロヴァンスの復活には、社会的および政治的な再興の期待が暗示されていると見ることができる。

この詩は三部から構成される。第一部は、高貴な伯爵夫人すなわちプロヴァンスに不穏なベールが覆い被さるという歌で始まる。続いて、伯爵夫人（プロヴァンス）の所有する豊かな都市や港、風土について語られ、詩人たちが育まれた場所としてその地の栄華が唄われている。第二部では伯爵夫人の姉妹が登場し、「彼女は連れ子であ

り、遺産を得るために修道院に閉じこもっている」という歌で始まる。そして、「年老いた者たちは三つに分かれた」と述べられる。歴史的にはプロヴァンスがトゥールーズとバルセロナによって分割統治されることを考えると、パリよりもカタルーニャとの繋がりをミストラルが重視していることが分かる[47]。ミストラルはこの横断的繋がりの意識のもとに、第二部の最後で「ラングドックの金麦が歪んだ半月鎌で切り取られ、高貴な姫君は死の晩課を歌う」と唄い、南フランスの衰退を表現している。第三部は、「一陣の北風（mistral）が起こったのを感じる、この北風—ミストラル—は栄華を好み、勇敢で、人々の代表である」という節から始まる。これは、第二部で描かれた南フランスの衰退に対してミストラル自身が先導をきって、この後に続く節の内容を導くかのように連想される。そして「悪い姉妹を物ともせずに、我々は修道院を解体する、我々は全てを一変させる」と唄われる。ここにある「悪い姉妹」（sourrastro）とは北フランス（パリ）を指し、それによって修道院に追い込まれていたことはプロヴァンスへの圧力を意味している[48]。この詩の最後には、「偉大な修道院（フランス中央政府）を解体し、[…] 女子修道院長（中央政府、あるいは皇帝）を絞首刑にする」と述べている。これは、明らかに中央政府に対する対抗的な意識があるのだと思われる。ミストラルの革命志向の詩であり、最終章に現れる「我々は解体する」（demoulirian, (仏; Nous démolirions)）という言葉は、分離主義かどうかは定かではないにしても、権威帝政を継続する中央集権的第二帝政の解体と連邦制の実現を希望するミストラルの主張が表れているということができる。

確かにミストラルの「伯爵夫人」は強い口調で書かれている。1866 年 11 月 1 日、ミストラルはこの詩を創作したときの感情をボナパルト・ワイズに次のように書いている。

> 「私はこの切望が正当なものであると確信しているし、私はこの考えに専心しているので、あなたにいうが、大風呂敷を広げることなしに、私は人々に向かい合ってその希望を告げるために邁進する。あなたもこの理想に酔いしれてください—この理想が決して実現されなかったとしても。」[49]

フェリブリージュの年間雑誌であるアルマーナ誌に掲載されたこの詩「伯爵夫人」に対し、いくつかの批判が起こった。その一人がフェリブリージュ創設以前に親交を深め、綴字法の意見の相違さえなければその会員になっていたと思われるガルサン（Eugène Garcin:1821-1909）であった。彼は 1868 年に出版されたパンフレットの

なかで、「不平を言い、報復を叫び続けている者は、本当に 19 世紀の詩人なのか。」と読者に投げかけて、この詩と詩人ミストラルを非難した。さらに、創設当初からフェリブリージュおよびミストラルに絶大な好意を寄せていた前モンペリエ大学教授で当時はパリ大学教授であったサン・ルネ・タイヤンディエ(Saint-René Taillandier: 1817-1879) からも批判を受けるほどであった。

ミストラルの「伯爵夫人」は確かに過激な表現を伴う詩であった。それでも、これと同様に連邦主義的政治思想が見られる『カランダル』は、第2版が刷られている。これは、プロヴァンスの人々の意識がどこかでミストラルに同調していることを表している点で興味深い。その一方で、ミストラルは「伯爵夫人」に対する批判を受けて、プロヴァンスのフランスからの独立 (分離主義) という意志がないことを主張することになる。この辺りは彼の政治意識の転換を意味しているのかどうかは定かではないが、1868 年 6 月の「アルコレ橋の鼓手」(Lou Tambour d'Arcolo) の発表は彼自身の愛国心への表明を意味していたのである。

7. おわりに

本稿では、19 世紀後半に南フランス、プロヴァンスの言語および伝統文化の復興を目指したフェリブリージュを中心に、その主要人物であるミストラルの連邦主義思想について検討してきた。本研究の最終的な目的は、プロヴァンスの言語と文化の保持を希求するミストラルが当時のフランスにおいて国家と地域の関係性をどのような意識の下で捉えていたか、そして、その意識がミストラル自身の活動にどのように反映されたかを明らかにすることである。本稿ではこの問題点の前提として、ミストラルがどのようにして政治意識を高め、連邦主義思想—ともすると分離主義と言われる点も含めて—を構築していったかについて検討した。

第二帝政以降、ミストラルは反帝政の思想を抱いていた。彼にとって最も重要であったのはプロヴァンスの言語と伝統文化の復興、保持であり、その意識はオック語に関わる伝統的なロマンス語地域に対しても同様であった。そのために、1860 年以降のカタルーニャの詩人たちとの交流はミストラルの政治意識を掻き立てたと思われる。実際、本稿で示したように、この時期のミストラルの作品や言動のいずれにおいても、彼の政治的活動への傾倒が認められる。とくに、カタルーニャのバラゲとの交流はミストラルの連邦主義構想を著しく昂揚させたと考えることができる。

それでは、ミストラルはどのような連邦制を求めていたのであろうか。フランスを

越えてカタルーニャや他の地域との連邦を考えていたのであろうか（分離独立主義）。あるいは、フランス国内での地方分権政府を擁する連邦制を考えていたのであろうか（連邦主義）。おそらくは、ミストラルの精神の内部ではこれら二つの考えが巡っていたのではなかったか。むしろ、第二帝政が主導する中央集権的体制において、フランス語や近代的合理主義による地域への侵攻、それによる伝統的な言語、文化の疎外こそが問題であったと思われるのである。

筆者はこれまでの研究で、フェリブリージュ創設期から晩年までのミストラル自身のプロヴァンスへの意識について検討してきた[50]。彼にとって最も重要であるのは、12 世紀のトルバドールに由来するプロヴァンスの言語と伝統文化を護ることであった。彼にとって連邦主義は一つの目指すべき理想ではあったが、それ以上に重要なキー概念は、「民族」（race、raco）、「地域」（nation, nacioun）、「言語」（langue, lengo）「民衆」（peuple, pople）であった。これらの概念は最初の「民族」に代表される。ここでいう「民族」とは、人類学でいう種族や部族といった血筋や地縁集団ではなく、むしろ、アイデンティティを共有する文化集合体を意味する。「民族」に対するミストラルの意識について、ダウナーはそれこそがミストラルの新たな考え方に基づいているとして、以下のように指摘している。

> 「彼［ミストラル］が意識していた“ラテン系民族”とは、その基礎として共通の歴史、伝統、宗教、言語を有する集合体のことである。［…］そして、彼は、何世紀にも亘って記憶、思考法、習慣、関心を共有化してきた一つの集合体としての南仏特有の“民族”が存在すると考えていた。」[51]

それゆえに、ミストラルはそうした地域の言語、伝統を復興させ、育むことに身を投じたのであり、それは彼のフェリブリージュもまた同様であった。したがって「フェリブリージュが発展すれば、そして、ミストラル自身の詩人としての活力が増せば、より多くの人々が同調する」と考えていたのである。

したがって、ミストラルの連邦主義もまたそうした彼自身の意識の延長線上で捉えられる。ミストラルの「プルードン的連邦主義」とは、「家族の長、コミューヌ、カントン、地方、国家」が「契約」を結ぶ言わば縦社会ではなく、それらが平等横断的に連携し合う体制を構築することであったのではないか。確かに 1867 年のパリ訪問の頃にはミストラルの政治意識、連邦制の実現に向けた欲求は頂点に達していたと思われる。しかし、それはフランス全体の政治体制のためではなく、あくまでプロ

ヴァンスのアイデンティティを護るためではなかったか。

それでも、ノーベル賞を受賞し、フランスのみならずヨーロッパに広くその名を知られるようになったミストラルが、地域の言語や伝統文化を尊重した体制を見ていたことも考えられる。本稿の冒頭で引用したファーブル（Pierre Fabre）は、ミストラルのさまざまな演説をふまえて、以下のように述べている。

> 「彼［ミストラル］が頻繁に展開したラテン的概念を通して、ヨーロッパ地中海のラテンへの先駆者的な考え方として、彼はすでにヨーロッパ、複数国家のヨーロッパ、複数の地域のヨーロッパ、複数の文化のヨーロッパを予見していた。複数の国家、複数の連邦国家を望み、それこそが共和政の最終的形態であると考えていた。」[52]

1866年以降カタルーニャ、イタリア、ロシア、アイルランドの詩人たちとの国際的な友好関係を築いていたミストラルは、フランス国家の枠に囚われない文化交流を思考していたと思われる。もし、ミストラルが国家を越えた連邦制を志向していたのであれば、それはとりわけ文芸、文化活動を深めるゆるい枠組みによる横断的な連邦制であったと推察される。しかし、ミストラルにとって重要であったのは、プロヴァンスの言語・文化の復興、保持であった。その意味では、フランス国内にとどまる共和政を備えた連邦制こそが彼が考えた理想像であったとも考えられる。ミストラルの地域意識と連邦主義思想の関係性を明らかにすることは、なおも課題として残されているのである。

参考文献

Armana Provençau, Avignon, encò de Roumanille, Libraire-Editour, 1867.

André, Marius, *La vie harmonieuse de mistral*, Plon, Paris, 1928.

Calamel, Simon et Javel, Dominique, *La langue d'oc pour étendard, Les Félibres (1854-2002)*, Toulouse, Privat, 2002.

Downer, Charles Alfred, *Frédéric Mistral Poet and Leader in Provence*, Columbia University Press, 1901.

Fabre, Pierre, *Mistral en Héritage*, Marseille, Autres Temps, 2002.

Garavini, Fausta, Le pari mistralien, *Romantisme*, Armand Colin, 1981, N.33, pp. 59-74.

Jourdanne, Gaston, *Histoire du Félibrige*, Avignon, Roumanille libraire-éditeur, 1897.

Jouveau, René, *Histoire du Félibrige, 1854-1876*, Nîmes, Bené, 1984.

Martel, Phillipe, Le petit monde de l'édition en langue d'oc au temps des félibres (seconde moitié du XIXe siécle), *Bibliothèque de l'École des chartes*, 2001, N.159-1, pp. 153-170.

Martel, Phillipe, *Études de langue et d'histoire occitanes,* Montpellier, Limoges, Lambert-Lucas, 2015.

Martel, Phillipe, *Des hommes et une langue: itinéraires biographiques, XIXe et XXe siècles*, Limoges, Lambert-Lucas, 2018.

Martel, Phillipe, *Le félibres et leur temps Renaissance d'oc et opinion (1850-1914)*, Pessac, Universitaires de Bordeaux, 2010.

Mistral, Frédéric, *Mes Origines Mémoires et Récits,* Paris, Aubéron, 2010.

Mistral, Frédéric, I Troubaire Catalan, *Œuvres de Frédéric Mistral, Les Îles d'Or*, Alphonse Lemerre Éditeur, 1889, pp. 164-177.

Mistral, Frédéric, La Coumtesso, *Œuvres de Frédéric Mistral, Les Îles d'Or*, Alphonse Lemerre Éditeur, 1889, pp. 178-191.

Mistral, Frédéric, *Calendau*, Centre International de l'Écrit en Langue d'Oc, 1998.

Proudhon, Pierre-Joseph, Du principe fédératif, *Œuvres Complètes de P. J. Proudhon*, Tome VIII, Paris, Librairie Internationale, 1868.

Ripert, Emile, *Le Félibrige*, Paris, 1924.

Adachi, Mina, The revival movement of "Poésies Provençales" and the formation of Provence Identity in the 19th century, "*Civilization*" (『文明』), Institute of Civilization Research, Tokai University, 2019, Special Issue (International Synposium: The 4th Dialogue between Civilizations), (in print).

Adachi, Mina & Hirano, Yoichi, The Modernity of Félibrige Movement in the 19th Century - from a Viewpoint of Language and Culture in Human Society, *ICIC Express Letters Part B: Applications*, ICIC International, Volume 11, Number 2, February 2020, pp.181-187.

ジャン・ヴィアル『教育の歴史』高村昌憲訳、白水社、2007 年。

小田中直樹『19 世紀フランス社会政治史』山川出版社、2013 年。

小倉考誠『19 世紀フランス　夢と創造』人文書院、1995 年。

工藤光一『近代フランス農村世界の政治文化–噂・蜂起・祝祭』岩波書店、2015 年。

谷川稔「社会共和国の夢から産業帝政へ」『近代フランスの歴史』高澤紀恵、上垣豊、長井信

仁、渡辺和行、中山洋平、長谷川まゆ帆、平野千果子、中島俊克、ミネルヴァ書房、2011 年。
中谷猛『近代フランスの自由とナショナリズム』法律文化社、1996 年。
福留邦浩「「フェリブリージュ」運動の形成とその理念－地域言語復興活動に内在する政治理念〈フェデラリスム〉をめぐって－」『立命館国際研究』22-2 号、2009 年。
フレデリック・ミストラル著、杉冨士雄訳、『ミストラル『青春の思い出』とその研究』、福武書店、1984 年。
フレデリック・ミストラル著、杉冨士雄訳、『プロヴァンスの少女　ミレイユ』岩波書店、1977 年。

---

1 1971 年から 1982 年までフェリブリージュのカプリエを務めた人物である。
2 Pierre Fabre, *Mistral en Héritage*, Marseille, Autres Temps, 2002, p.133.
3 Ibid., p. 133.（[　] は筆者の補足、以下同様）
4 Phillipe Martel, *Études de langue et d'histoire occitanes,* Montpellier, Limoges, Lambert-Lucas, 2015, p. 161.
5 Gaston Jourdanne, *Histoire du Félibrige*, Avignon, Roumanille libraire-éditeur, 1897, p. 247.
Art. 2. — Sont interdites dans les réunions félibréennes les discussions politiques ou religieuses.
6 杉は 1877 年に「左翼のフェリブリージュ」としてオーギュスト・マランを中心とする「海浜派（Escolo de la Mar）」、ルイ・グザヴィエ・ド・リカールおよびオーギュスト・ リカールによる「ラングドック派」を挙げている。
杉富士雄「ミストラル年表」、『プロヴァンスの少女　ミレイユ』岩波文庫、1977 年、288 頁。
7 福留邦浩「「フェリブリージュ」運動の形成とその理念－地域言語復興活動に内在する政治理念〈フェデラリスム〉をめぐって－」、『立命館国際研究』22-2 号、2009 年、251 頁。
8 Pierre Fabre, *Mistral en Héritage*, 2002, p. 138.
9 Pierre-Joseph Proudhon, " Du principe fédératif ", *Œuvres Complètes de P. J. Proudhon*, Tome VIII, Paris, Librairie Internationale, 1868, p. 47.
「フェリブリージュ・ルージュ」については以下を参照した。
Phillipe Martel, " Félibres rouges ou rouges félibres ", *Études de langue et d'histoire occitanes*, 2015, p. 161.
Phillipe Martel, *Le félibres et leur temps Renaissance d'oc et opinion (1850-1914)*, Pessac, Universitaires de Bordeaux, 2010, p. 484.
Simon Calamel et Dominique Javel, *La langue d'oc pour étendard, Les Félibres (1854-2002)* , Toulouse, Privat, 2002, p. 141.
福留邦浩「「フェリブリージュ」運動の形成とその理念－地域言語復興活動に内在する政治理念〈フェデラリスム〉をめぐって－」2009 年、255 頁。
10 工藤光一『近代フランス農村世界の政治文化—噂・蜂起・祝祭』岩波書店、2015 年、81 頁。
11 実際、南フランスにおいても、一方では山岳派の最左翼、他方では王党派（右翼）の政治的対立が激化していた。
Phillipe Martel, *Des hommes et une langue: itinéraires biographiques, XIXe et XXe siècles*, Limoges, Lambert-Lucas, 2018, p. 96.
12 1851 年 12 月 2 日、ルイ・ナポレオンのクーデタによって第二帝政が設立された際、プロヴァンスは、共和国を守るために最も強くそれに抵抗した地域の一つである。武器を取っ

た数千人の人々に対して、フランス政権は軍隊を送り、彼らをアルジェリアに追放した。

[13] 谷川稔「社会共和国の夢から産業帝政へ」『近代フランスの歴史』高澤紀恵、上垣豊、長井信仁、渡辺和行、中山洋平、長谷川まゆ帆、平野千果子、中島俊克、ミネルヴァ書房、2011年、139頁。鉄道網の整備は1840年代以降に急速に進展する。
小倉考誠『19世紀フランス　夢と創造』人文書院、1995年、22頁。

[14] ジャン・ヴィアル『教育の歴史』高村昌憲訳、白水社、2007年、78頁。1827年には過半数（58パーセント）が完全文盲者であり、1845年に38パーセント、1868年に20パーセントと40年で人口の8割が識字者となったことがわかる。

[15] Phillipe Martel, *Des hommes et une langue: itinéraires biographiques, XIXe et XXe siècles*, 2018, p. 95.

[16] タラスコンの町で伝えられる聖マルタが怪物タラスクを鎮めた伝説に由来する祭り。

[17] René Jouveau, *Histoire du Félibrige, 1854-1876*, Nîmes, Bené, 1984, p. 139.

[18] Frédéric Mistral, " I Troubaire Catalan ", *Œuvres de Frédéric Mistral, Les Îles d'Or*, Alphonse Lemerre Éditeur, 1889, p. 175.

[19] René Jouveau, *Histoire du Félibrige, 1854-1876*, 1984, p. 149.

[20] ボナパルト・ワイズは1868年に自らのプロヴァンス語の詩集"*Li Parpaioun Blu*"を出版している。

[21] Lloyd Austin, *Poetic Principles and Practice*, Cambridge University Press, Cambridge, 1987, p. 184.

[22] René Jouveau, *Histoire du Félibrige, 1854-1876*, 1984, p. 187.

[23] Ibid., p. 188.

[24] 『カランダル』は1867年1月に発刊される。
Mistral, Frédéric, *Calendau*, Centre International de l'Écrit en Langue d'Oc, 1998.

[25] Fausta Garavini, " Le pari mistralien ", *Romantisme*, N.33, 1981, p. 62.

[26] Philippe Martel, *Le petit monde de l'édition en langue d'oc au temps des félibres (seconde moitié du XIXe siécle)*, Bibliothèque de l'École des chartes, 2001, N.159-1, p.167.

[27] Ibid., p. 162.

[28] René Jouveau, *Histoire du Félibrige, 1854-1876*, 1984, p. 201.

[29] Ibid., p. 202.

[30] 木下賢一「第二共和政と第二帝政」、『世界歴史大系　フランス史3—19世紀なかば～現在—』権上康男、大森弘喜、中野隆生、福井憲彦（編者）、山川出版社、2006年、112頁。

[31] 歴史的にはローマ時代の女神フローラに由来する祝祭で、詩文に関する3つのコンクールを含む詩文会。カタルーニャではJocs Floralsと呼ばれるが、プロヴァンスでは後にフランス語でJeux Floraux と呼ばれる。

[32] 1859年のバルセロナにおけるJocs Floralsでは「愛国心」、「信仰」、「愛」が主題となりそれぞれに金賞が送られた。とくにこれら3つの金賞を獲得した者は"Mestre en Gai Saber"としてその栄誉が称えられる。

[33] René Jouveau, *Histoire du Félibrige, 1854-1876*, 1984, p. 199.

[34] *Armana Provençau*, Avignon, encò de Roumanille, Libraire-Editour, 1867, pp. 72-75.

[35] Ibid., pp. 19-23.
ここではJouveau, pp. 194-195.も参照した。「伯爵夫人」に見るミストラルの政治思想については第6節で検討する。

[36] 後にイザベル女王を退位させることとなるプリム将軍は1868年にこの反体制派に加わるが、1866年10月初旬に彼によってバラゲが召集されている。これはプリム将軍が8月に進歩派と民主党の行動委員会（un comité de acción con progresistas y demócratas）を設立した約2ヶ月後のことである。バラゲはこのときプリム将軍のいたジュネーブに向かうことになる。他方、ジュヴォーによればバラゲはイサベル女王のスパイであったという指摘もある。
René Jouveau, *Histoire du Félibrige, 1854-1876*, 1984, pp. 196-197.

[37] Ibid., p.196.
[38] Ibid., p. 204.
「マジョラル」とはフェリブリージュにおける各部局の指導者のこと。
[39] Marius André, *La vie harmonieuse de mistral*, ,Plon, Paris, 1928, pp. 103-104.
[40] Ibid., p. 101.
[41] Ibid., p. 102.
[42] 「地方分権」という言葉は 1820 年代に現れるが、第二帝政期におけるそれはボナパルティスム体制に対する批判と相まって展開した。たとえば、1865 年にロレーヌ地方の名望家層とナポレオン 3 世を含む中央の政治家により分権化案「ナンシー綱領」が作成されている。これはその後の制度思想に影響を及ぼしている。
中谷猛『近代フランスの自由とナショナリズム』法律文化社、1996 年、192、212 頁。
[43] ジュヴォーは、詩人のテシエ（Leon Teissier: 1883-1981）やルーベ（Joseph Loubet: 1874-1951）の研究ではミストラルがわずか 2 週間の滞在でパリから戻ったことを紹介しながらも、これは誤りであると指摘している。
René Jouveau, *Histoire du Félibrige, 1854-1876*, 1984, p. 205.
[44] Ibid., p. 205.
[45] Frédéric Mistral, " Note (La Coumtesso) ", *Œuvres de Frédéric Mistral, Les Îles d'Or*, Alphonse Lemerre Éditeur, 1889, p. 527.
René Jouveau, *Histoire du Félibrige, 1854-1876*, 1984, p. 327.
[46] Frédéric Mistral, " La Coumtesso ", *Œuvres de Frédéric Mistral, Les Îles d'Or*, Alphonse Lemerre Éditeur, 1889, p. 178.
[47] 実際には、ギヨーム一世の家系とカタルーニャのバルセロナ伯家、ルボー一世の家系とトゥールーズ伯家がそれぞれ婚姻関係を結ぶことによって、プロヴァンスの分割統治がなされる.
[48] René Jouveau, *Histoire du Félibrige, 1854-1876*, 1984, p. 197.
[49] Ibid., p. 197.
[50] Mina Adachi, "The revival movement of "Poésies Provençales" and the formation of Provence Identity in the 19th century", *Civilization*（『文明』）, Institute of Civilization Research, Tokai University, Special Issue (International Synposium: The 4th Dialogue between Civilizations), (in print).
Mina Adachi & Yoichi Hirano, "The Modernity of Félibrige Movement in the 19th Century – from a Viewpoint of Language and Culture in Human Society", *ICIC Express Letters Part B: Applications*, ICIC International, Volume 11, Number 2, February 2020, pp.181-187.
[51] Charles Alfred Downer, *Frédéric Mistral Poet and Leader in Provence*, Columbia University Press, 1901, p.15.
[52] Pierre Fabre, *Mistral en Héritage*, 2002, p. 138.